
~ 覚醒(めざめる) 魂(こころ) ~

カラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めいめん
じじく
〜覚醒 魂〜

【Nコード】

N0550BA

【作者名】

カラス

【あらすじ】

フと思いついた話です

更新不定期すぎると思います

それでもOKの ころころ優しい読者さんに 感謝

|||||

万事屋は 何時もの三人で街をブラブラ 平和な日々

そんな中 街では辻斬りが 横行してるとのニュースが…

その一方 真選組はある兵器の調査をしていて…

一話 く怪しい影く

真つ暗な 部屋の中に 佇む女… 歳は恐らく 17・8位か…

その女は 何をするでもなく そこに立ち尽くして居る
光もない部屋に…

その女が 目に着けている機械

その機械は 真ん中に目のような 赤い光を放っていた
その光が唯一の光だった

そんな 暗い部屋にまた一人 男が入ってきた

男は 女が放っている光を頼りに 女の前までいくと

写真を 一枚取り出し女の目の前に見せる

「この写真は 攘夷戦争で 活躍した男の写真さ」

そう女に語る男

女は 黙って写真を見つめている

「コイツは 白夜叉と呼ばれた男だ 終戦後 姿を消したらしいが
生きてるって噂だ」

女はその言葉に 男へ視線を移した

「零号 お前は優秀な戦闘兵器だ だがお前には もっと強くなっ

てもらいたい お前は俺の言っていることが分かるな？」

零号と呼ばれた女は 静かに頷く

「なら 白夜叉のデータを取ってこい」

そう言う 男には黒い笑みが浮かんでた

女は 再び頷くと部屋を出ていった

二話 く辻斬りく

くかぶき町く

「銀ちゃん 酢昆布買ってヨ」

「ふざけんな てめーの小遣いで買え」

「そんな事 言っても 銀ちゃん お小遣い滅多にしてくれないネ」

「そうですね 僕なんか お金一千も 貰った覚え無いんですけど」

「うつせエ 俺だって 家賃の回収やら 大食い娘と犬の食費やらで金がねーんだよ」

「だったら銀ちゃんが 甘いもの我慢したら良いネ」

「えっ？ 何言っちゃってるの？ 俺から甘いものが無くなったら ただの 天パしか残らないからね？ メガネの無い新八みたいな もんだからね？」

「メガネの無い僕ってどうゆう事ですか…」

「そのままの意味ネ そんな事も分からないアルか？ だからお前は 新一じゃなく新八ヨ ねー定春」

「アン」

「新八の名前を全否定された!!」

そんな会話をしている三人と一匹

銀髪の天然パーマ 腰には洞爺湖と刻まれた木刀を差してるのが
万事屋オーナー 坂田銀時

傘をさしチャイナ服を着ている女の子が 万事屋 ヒロインの 神楽

メガネをしているが容姿がとにかく地味な男の子が 万事屋雑用
志村新八

そして普段の犬より何十倍 大きい犬が ペットの定春

その人達は万事屋と言う店を営んで かぶき町でも有名である

万事屋は 電気屋に通りがかり テレビではニュースが流れていた

「続いて 次のニュースです 最近かぶき町で 多発している 攘
夷志士を狙った辻斬りの被害が 昨夜で30名を上回ったとの事で
す 更には目撃した一般人3名が 被害に遇ったとの事 一般人が
被害に遇のは 昨夜が初めてで 幸い皆軽傷で済んだとの事です
被害者の目撃証言から 犯人が女性だと判明しました そして犯人
は 左目に機械らしき物を 装着してたとの………」

ニュースは続いている

「辻斬りですか… 怖いですね」

「私 辻斬りって言ったら 紅桜思い出すヨ」

「アン」

「でも良かったですね 3人でも生きてる人が居て」

「何言ってる 攘夷志士30人も斬ってる 奴が一般の人間を殺し損ねる わけねーよ」

「えっ!! だったら…」

「わざと見逃したアルか? 何のために…」

「さーな 本人にしかわかんねーことだ」

そう呟くと 銀時は先に歩き出す 神楽達はその後ろを 離れないように ついて行った

三話 人間兵器！??

真選組 屯所

「はア！？ 人形の機械からくりだア？」

「はい 最近浪士共で 噂になってて ソイツが新しい機械兵器からくりだとか」

「兵器？」

「はい ソイツの 戦闘力がずば抜けてると」

「戦闘力が？」

「はい 脚力 腕力 瞬発力 スピード 戦闘種族 夜兎まではいきませんが 茶吉尼位は圧倒すると…」

報告しながら その場にいる三人に 写真を渡してるのは 真選組 監察の 山崎退

煙草を吸いながら 写真を受け取っているのが 「鬼の副長」と恐れられてる 真選組 副長 土方十四朗

土方と共に写真を受け取っている ゴリラの様な人が 真選組 局長 近藤勲

そして 同じく写真を受け取る 栗毛の少し 童顔に見える青年が 真選組 1番隊 隊長 沖田総悟

「でっ？ その機械が 例の辻斬りの犯人ってわけですかイ？」

「目撃証言からすると 恐らくそうだと…」

「だが 主犯の狙いが分からなきゃ 防ぎようが無いぞ」

「まア 俺達にしたら仕事が減って楽ですがねィ」

「何言つてやがる てめーが仕事してる姿なんて 此処1・2カ月 見たことねーがな」

「何言つてんですかイ？ 俺は何時もパトロールと言う名のサボリ…じゃなかった 仕事を…」

「おい 今完全にサボりつて言っただろ」

「ヤダなー 土方さん言い間違いですよ 言い間違い」

「イヤ 総悟… サボりと仕事は 正反対の意味だ 言い間違えねーぞ 普通は… まア良い 山崎引き続き捜査をしる そして黒幕を掴めいいな」

山崎は頷くと 部屋を出ていった

土方は吸っていた煙草を消しながら 山崎から受け取った写真を見た

その写真は 左目に眼帯の様に機械かいくじが付けられている…と言うよりは 組み込まれると言う方が正しいだろう
それさえ無ければ ただの普通の女だ

「にしても 此奴ホントに機械が（からくり）なんですかイ？ た
だの女にしか見えませんゼイ」

「確かにな この子もしかしたら…」

「関係ねーな 機械からくりだろうが何だろうが ぶった斬るだけだ」

「そいつはスゲーや 土方さんが居れば 戦闘兵器もすぐに片付き
ますねイ」

そう言うと 沖田は部屋を出ようとする

「おい 総悟どこ行くんだ？」

「見廻り… サボりに行ってきまさら」

そう言うと 部屋を出て行った

「彼奴遂にサボりと認めやがったぞ… しかも言い直しやがった」

「まー 良いじゃないか 見廻りが無いよりはましだろう」

「まア それもそうだが…」

「それに 何かあったら 総悟も動くだろう」

近藤もそう言うと 部屋を出て行く

土方はため息をして 再び煙草を取り出し 火をつけた

三話 人間兵器！？（後書き）

読者の皆様

更新不定期で 申し訳ない

誤字 脱字があつた場合は 教えて下さると嬉しいです
あと 欲を言えば評価と感想をくれると…

今 読んで下さってる読者の皆様に 感謝を

四話 く火事く

くかぶき町く

長屋が建ち並ぶ道を歩いている 一人の女…

その女は 笠を深く被って 顔は見えない

女が道を歩いていると 廻りがザワザワしていた

「火事だアア 火事だアア」

その叫び声に廻りの村人は 騒ぎだす

直ぐに 火事の発生場所は分かった

女は そこを避けようとした時

「美菜^{みな} 美菜」

恐らく子供の名前だろう 村の女が名前を叫ぶ声が聞こえた

女はその声がしたとたん 立ち止まった

村の女は 笠を被った女に声を かけてきた

「あの ことから辺で 此の位の背丈の女の子見ませんでした？」

そう言うと 腰の辺りに手をやって 美菜と言う 女の子の背丈を示す

女は 暫く黙って笠の中から見てたが

「いいえ」

そう ぎこちなく何処か機械的に答えた

「そうですか…」

村の女は 悲しそうに返事をすると 再び廻りの村人に聞き出した女はその姿を 暫く見つめると 向きを変えて 火事が起きてる方へと向かった

笠を被った女は 村人の逃げ惑う群や 野次馬の群を掻き分けて 徐々に火元へと向かっていた

時より 村人から怪訝な顔をしている者や 止めようとした者も居たが そんなことはお構いなしに 火元へと向かう

ついに女は火元の近くまで行き 火消しが来るまで 火が廻らないように処置をしている 村人達の元まで来た

村人達は女に気づくと 一人の男が近づいてくる

「君 何してる！？ 女子供は早く逃げろと言われたろ！！！」

村の男が そう言うが 女は何の反応も示さない 反応もしない上に 笠で表情も読み取れない

「火事のことは俺達に任して ここ危険だから 早く離れて」

そう言うて 女の右肩に手をかけると…

「……命令拒絶 強行態勢に入ります……」

そう呟くや否や 肩にあった男の腕を握り 凄い勢いで腕を反らした そしてボキッと鈍い音がしたとたん

「ギヤアアアアアア」

そんな耳を劈く叫びが聞こえた

男達は叫び声の方に目を移す

そこには…

男が左腕を右手で抑え 地に這いつくばる姿があった
そして それを平然と見下している女…

その叫び声が誰のものか 一目瞭然だった

それを見た男達は 恐怖のあまり その場を立ち尽くしていた
女はそれを見ると 黙って燃え盛る家へ歩みを進める

だが 近くに居た男が 女を追いかけようとしたが 女は立ち止ま
り その男に向きを変える
男は驚き急ブレーキをかけた
あと少し 判断が遅れてたら ぶつかって居ただろう

だが 女は顔を上げることなく

機械的な 感情の無い様な口調で言葉を発した

「左腕骨折… 全治1カ月〜2カ月」

「『えっ！』『』『』」

女の行き成りな発言に 男達が驚いていると 女は再び燃え盛る

家に進みだす

そこに居た男達が声を かけようとした時には 燃え盛る家へと
姿を消して行った

四話 〵火事〵 (後書き)

説明文長いですね…

五話 〱猫探し〱

〱同じ頃〱

万事屋もその火事の起きた 場所の近くを歩いていた

「あーあ せっかくパフェ食って来て 今日はこのまま家でジャンプ読んで 凄そう何て思ったのによー 何で今日に限って客来んだよ」

「そうネ しかも猫探しなんて 面倒な依頼ヨ 報酬もしけた金額だったアル」

「だよなー 人にも頼むなら それ相応の金額貰わねーと」

「そうアル 私達だって 暇じゃないネ 私今から酢昆布買ってくるヨ」

「じゃー 俺はまたパフェ食いに行つて パチンコに…」

「これの何処が 暇じゃないって言うんですか アンタ達がやってるのは ただの暇潰そのものですよ」

「暇潰しだからこそ 本気で楽しまなきゃよー」

「だったら 仕事も真面目にやってください だから依頼が減るんですよ…」

「うるさいネ ダメガネは黙ってるヨロシ」

「本当のダメ人間に言われたくないわ」

「アン!! やんのか このメガネのレンズ粉々に 砕いてやるヨ」

そう言つて新八の胸ぐらを掴む神楽

「イヤ… すつませんでした…」

……

彼等がなぜ こんな所に居るかと言つと…

（数時間前）

散歩から帰つて来た万事屋は部屋でダラダラしていた
時に ピンポン 万事屋に響くチャイム

「新八」 客だぞー つて彼奴 飯買いに行つたんだ」

「……しょうがないアルな ここは私がいくアル 誰も居ませんヨ
」 居留守ですヨー」

そう言いながら 鼻くそを穿る神楽
すると 再びチャイム音が…

「しつこいアルなー …… まさか居留守がバレたアルか？」

「バカか？ あんなバレバレの居留守があるか！」

そう言うと 神楽の頭を小突く
そんな時

「ただいまー」

つと 玄関が開く音と共に 新八の声が聞こえてくる

「あつ どうぞ中に入ってください」

そう先導する声と共に 二つの足音が銀時達に近づいてくる
そこには 新八と中年のおばさんが居た

「二人とも お客さん位 出てくださいよ すいません 待たせち
やって どうぞ座ってください」

そう言うと おばさんは ソファーに座る

「っで依頼の内容は……」

……

依頼内容は猫探し 幸い猫は直ぐに見つかり
今から万事屋に 帰るところだ

六話 人探し

「そう言えば ことから辺 騒がしいアルな」

そう言いながら 新八の胸ぐらを離し 周りを見渡す
そんな時 後ろから声が聞こえた

「あれ？ 旦那方じゃねーですかイ」

万事屋が振り向くと 真選組 沖田総悟が立っていた

「サド！！ 何でお前が此処に居るアルか！？ さっさと失せるヨ
ロシ 胸くそ悪いアル」

「それは此方のセリフでイ」

そう言うと二人は 睨み合いを始める

「二人とも落ち着いてください」

新八がなだめるのを聞かずに 睨み合いを続ける

「喧嘩すんだつたら 別の場所でやれ てめー等の喧嘩は 甚大な
被害が出るんだよ 俺は捲き込まれるのはごめんだ」

そう言って 二人の頭を殴る銀時

新八は 二人が睨み合いを再開しない内に沖田に話しかけた

「あの沖田さん ことから辺騒がしいですが 何かあったんですか？」

「あー 確かここら辺で火事が起きてるみたいですよ」

「火事ですか……」

新八が呟くと

「あの すみません」

その声に万事屋と沖田が 声の主に向きを変える

そこには前話に 子供を探し廻っていた女が立っていた

「あの この位の背丈の女の子 見かけませんでした？」

そう言うと 女の腰辺りを示す

「イヤ 見ませんでしたよ その女の子 何時から居なくなっただんですか？」

「近くで火事が起きたのは知ってますよね？ あの子それくらいから探しても見つからなくて……」

万事屋はその答えに確信していた その子供は火の中に居ると それは沖田は勿論 母親も分かって居るだろう それでも探しているのは きつと……

「大丈夫ですよ 俺ア一応 警察なんでね しかも その人達は困ってる奴を見捨てられねー お人好しなんでさア」

そう言つて万事屋を示す沖田に女は泣いていた顔を上げる

「ちょっと沖田くん 何勝手な事 言ってるの!！」

「そうアル 人探しは警察の仕事ヨ お前一人でやるヨロシ」

「別にいいじゃねーですかイ どうせ暇なんですから」

「言っとくけど 俺達は……」

「ありがとうございます 私はあっちの方を探しますから 皆さんはあっちの方をお願いします」

そう言つて 女はすぐに来た道を 走つて行つた

「えっ!! ちょっとお姉さん……」

そんな銀時の叫びを聞かずに女はどんどん走つて行つた

「……行つちやいましたね」

「行つちやつたアルな」

「行つちやいやしたね どうします? 旦那?」

「本はと言えば オメーが原因だろーが!! これは借りだ」

そう言つと 銀時は女が走つた方とは逆に歩き出した 残つた三人も また散らばり女の子を探しに行つた

七話 く助けく

く火事の家の中く
笠を被っていた女は 消火活動をしていた男達をおしきり 火事の家へと入っていた
女は辺りを見渡ししながら しかし顔を上げることなく 火事の家をうろついて居た
その時

「……………けて た…け… お母さ…」

微かに聞こえた声の元に女は歩みを進める
そこには 家財道具に脚を挟まれ動けない 女の子が居た
女はその女の子の前に立つと 女の子は当然 驚きの顔を隠せずに居た

「お姉ちゃん……………誰？」

女の子の質問に 女はその子の前にしゃがむと（女の子が見上れば 顔がよく見える） あの平坦と 言うよりは機械的な口調で答えた

「……………助けに……………来た」

女の子はその答えに驚いているのか それとも笠の中の顔を見て驚いているのか またはその両方か 何れにしる驚いた表情は変わらなかった
女はそんな女の子には構わず 脚を挟んでいる家具を退かそうと立った時

「!!お姉ちゃん 危ない!!」

そう言われ 振り向くと柱が火を放ちながら 勢いよく倒れてきた

八話　く脱出く

女の子は恐怖に目を瞑った

ドーン

そんな柱が倒れる音がした

だが女の子の体から　倒れた柱の重さを感じられなかった

不思議に思い女の子は恐る恐る　目を開けると

笠を被って居る女が　柱を支えていた

その様子から見ると　あの音は恐らく柱が折れ　その部分が倒れた
のだろう

「お……お姉ちゃん」

震える声で女を呼ぶ

女の子が震えるのもムリはない　その柱を支えている右腕は

肌色の部分が剥げて　からくり機械が見えたからだ

義手とも似ていたが　からくり機械と言う方が正しいだろう

左腕は本物なのだろう　火傷を負っている

だが女は柱を反対側に　平然と押し倒して

女の子の挟まった家具を退かした

「……立て……る？」

あの平坦な　機械的な口調で聞いてきた女に　女の子は首を横にふる

「脚が動かない……」

女の子が答えると 女は黙ってその子を抱き抱え 脱出した

暫くして

女の子は安心したのか 途中で女の腕の中で 寝息をたてていた
まア無理もない あんな絶体絶命の体験をして 疲れないわけがない

女も暫く あの母親を探したが見つからず 公園のベンチに座って
居た

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0550ba/>

～ 覚醒(めざめる) 魂(こころ) ～

2012年1月11日00時45分発行